

## 和紙の20世紀

17世紀半ば日本では権力闘争が終結し、覇者である徳川幕府は海外との交易を原則禁止し国内の統治と産業振興に務めました。和紙の生産はそれまでにも重要な産業でしたが、地方の行政は増産を奨励し、現金収入の資源として厳しく管理しました。その結果生産は飛躍的に拡大し、18世紀後半に開国した頃には“木と紙でできている”と外国人を驚嘆させたライフスタイルが庶民にまで普及しました。和紙は文書用だけでなく衣、住の生活全般に活用され、いわば当時の日本をささえる最も重要な生活関連産業でした。

開国は和紙のある暮らしのあり方に2つの大きな衝撃をもたらしました。一つは西洋のライフスタイルが紹介され、その斬新さが憧れの対象となったことでした。何かにつけて和風より洋風が好まれ、伝統的な価値観と文化が軽んじられる風潮が生まれました。和紙に代わる生活物資が好まれ、日々の暮らしから和紙が減りはじめました。

二つめは生産現場での変革で、西洋式の機械製紙が導入されたことです。

20世紀は和紙がいかにしてこの受難に対応し今日にいたったか、苦難の軌跡なのです。

### 1900年から敗戦まで

開国から当初の30年、和紙業界は西欧化にすばやく対応し、輸出品としての新しい販路を開拓しました。また動力の導入で省力化につとめて生産効率をあげ、和紙の生産家は20世紀初頭過去最高の66,000軒となりました。その一方生産現場では薬品を使用し、パルプを混入することが改良とされ、品質が低下しはじめました。従来の和紙はロングライフと強靭さを誇っていましたが、機械生産の洋紙に対抗するための変革は、かえって和紙本来の評価を下げる結果となりました。1903年国定教科書の用紙が和紙から洋紙に切り替えられたことをターニングポイントとして和紙は衰退へと向かいました。安価で大量というニーズに対しては、工業製品が手造り品に取って代わるという経済原則から和紙も例外ではありえないという冷徹な現実でした。

有力産地では紙業組合を結成し、製紙試験場を設立して対応策を講じました。

大蔵省印刷局抄紙部は和紙生産の近代化のために練習生をつのり、最新製紙術を教え、その指導のもとに機械漉きの和紙生産がはじまり、有力産地は競って機械を導入しはじめました。千年以上にわたる手漉きの伝統に機械生産が加わり、和紙は機械漉きとの共存という全く新しい時代を迎えることになったのです。

こうした動乱の中で、和紙を愛好する文化人が伝統的な和紙を守ろうとする紙漉きをバックアップして、和紙復興の運動を始めました。1933年民芸運動を推進していたグループが和紙をとりあげ、雑誌（民芸）が和紙の特集を出版いたしました。この年Dard Hunterが日本の紙漉きを調査し、和紙がすぐれた手漉き紙であると賞賛して関係者を勇気づけました。程なく京都では寿岳文章らがグループを結成し、合理的な和紙の歴史研究により和紙の原点である用と美を守るための啓蒙運動を始めました。同時期東京では王子製紙の関係者らによって（紙話会）が結成され、その活動は今日（紙の博物館）に継承されています。

寿岳文章、静夫妻は戦争へと向かう状況下、全国の紙漉き村を訪ね、和紙のフィールドワークといえる（紙漉き村旅日記）を著しました。戦争が現実として迫る中、和紙の生産は軍需産業とみなされ厳しく管理されました。戦争末期には和紙の産地のすべてが風船爆弾の用紙を漉くように軍から命じられ、留守をあずかる老人や子女までが動員される異常事態のなかで、日本は敗戦を迎えました。

1945年から1980年まで

敗戦直後の和紙生産家は一万弱でした。戦後の復興期にはあらゆるものが不足し、働き手は工場労働者として都会に吸収され生産基盤としての農山村は存立の危機に直面しました。アメリカ型の消費生活がモデルとなり、従来の生活様式で多用された和紙は工業製品に取って代われ、日本が高度経済成長にはいる1970年には和紙生産家は847戸にまで激減しました。

存亡の危機に瀕してついに和紙の生産者が立ち上がり、全国手漉き和紙連合会を結成し、和紙振興のための活動を始めました。1975年には全国に点在する若手後継者の交流の場として『手すき和紙青年の集い』が発足し、現在も継続されています。

戦後の復興も一段落し、戦火で損なわれた文化財の回復や調査が本格的に始まっていました。和紙研究会の同人は、メンバーに科学者町田誠之を加えて、正倉院に収蔵されている紙の調査研究に取り組み、古代紙研究の先鞭をつけました。文化庁技官であった柳橋真は辺境の紙漉きを現地にたずねて実情を調査し、保護育成等、国の施策へと導きました。

1968年に伝統工芸の一分野として文化庁が重要無形文化財保持者として伝統技能の継承者を認定し、経済的な支援をはじめました。1974年には通産省が伝統的工芸品産業の振興に関する法律を制定し、和紙関連の事業を支援し始めました。それにより有力産地には拠点としての会館や研修施設などが開設されて、敗戦後の動乱を潜り抜けて生き延びた産地に衰退の歯止めをかけることが出来たのです。

1974年には当時の手すき和紙を集大成した『手漉き和紙大鑑』が刊行され、大きな話題となりました。和紙啓蒙運動をおこした和紙研究会の同人たちが結集した未曾有の大事業の成功がきっかけとなり、和紙にかかわる豪華本の出版が相次ぎました。これらの多くは和紙生産の現場に精通した京都の森田康敬と、和紙研究会に戦後参加した京都の科学者町田誠之、ジャーナリスト久米康生たちの精力的な活動で実現したものです。この出版以降久米は和紙研究を本格化し、東京の和紙研究の新しい核として現在も活躍中です。1979年には中断されていた『和紙研究』16号、1984年には17号が森田という次代の担い手をえて復活刊行されました。創刊当時のスタイルで和紙を用紙とした格調高いもので、和紙研究の再来と大いに期待されましたが、印刷技術の近代化に和紙が適合できないことや、オイルショックによる出版事業の不振のために継続されませんでした。

1980年以降 『国際紙会議 '83 京都』

和紙大鑑には五百余軒の紙漉きからの手すき和紙が収められています。

生活必需品としての和紙はすでに過去のものとなり、和紙は伝統的な儀式や祭礼、古文化材の修復、書道や日本画、日本建築の素材などの限られた用途の特殊な素材とみなされていました。

こうした閉塞的状况に衝撃をあたえたのはアメリカでおこった新しい紙造形でした。

和紙に関心のある芸術家や関係者がはじめて纏まって来日したのは1978年に開催され『世界クラフト会議』でした。工芸のあらゆるジャンルを網羅した同会議で、和紙は個別の部会をもったのですが、参加者が殺到して日本側の関係者を驚かせました。日本古来の手漉き紙が世界の芸術家の目にふれて、その今日的な価値が再認識されることとなったのです。手漉き紙をめぐる国際交流はにわかには活気づき、紙匠や若手の後継者が海外に招かれて技を披露する機会が増えてきました。

同じころアメリカのキュレーターJane Farmerによる『New American Paper Work』の京都近代美術館への巡回が決定し、その機会にシンポジウム開催の機運がたかまりました。

海外での実演などの体験に触発されていた若手後継者たちが核となり、WCCを成功させた京都の産官学の協力体制がバックアップして、日本の伝統的な和紙の文化と海外の新しい芸術との出会いが、京都を中心に全国の和紙産地で繰り広げられました。

13カ国260名の海外参加者を迎えた『国際紙会議‘83』は紙文化の国際交流を一気に加速し、20世紀最大のイベントとして世界の紙文化史に新たな1ページを加えました。

開催当時には意識されませんでしたでしたが、1983年はダード・ハンター生誕100年目、初来日から50年目の記念すべき年で、ハンターの偉業は京都で大きく開花することになったのです。参加者の多くは紙文化推進のための世界的なネットワークの必要性を痛感し、その思いは和紙の国日本の責務として日本の関係者の課題となりました。

#### ポスト IPC 『日本紙・アカデミー』の設立

1988年『国際紙会議‘83』の実行委員長で京都商工会議所の副会頭小谷隆一を中心に、日本紙・アカデミーが発足しました。和紙研究会発足から50年余り、組織のあり方は違っても、創立会長である町田誠之によれば、その精神は継承されているということです。以来20年、京都に事務局を置いて2つの国際会議、4つの国際紙造形展、調査研究と発表会、出版、機関紙の発行など、海外関係機関との連携によって活動しています。

『国際紙会議‘83』をきっかけとして、有力産地は独自の国際的な活動をはじめました。同年夏阿波和紙伝統産業会館は手すき和紙研修会を開催し海外からの参加者も受け入れ、定例のイベントとして現在も継続されています。産地への行政のバックアップもしいに強化されて、村おこしや観光客誘致のための切り札として施設の強化や産地の復興が実現したところもあります。美濃市はアーティストインレジデンスの制度を1997年から始め、毎年世界から5人のアーティストを招いて3ヶ月に亘って作品製作と発表の場を提供し続けています。これらのプロジェクトには行政側から出向した公務員のほかにも、都会から移り住んで、紙漉きの技術を習得するものや、ボランティアなどが協力し、地域ぐるみの運営がなされています。最初に和紙づくりの技術を完全にマスターした外国人はティモシー・バレットで、それは80年代の初めのことでしたが、いまでは産地に研修にくる外国人も多く、中には産地に住み着いて制作している外国人も珍しくなくなりました。一子相伝の家業であった紙漉きに志して入門し、紙漉きのプロとして独自の活動を始める独立系の紙漉きの第一世代が次第に増えています。和紙は広くデザイナーや芸術家の注目される領域となり、有力産地は新しい造形マインドをもった若手を迎え入れはじめました。こうしたポストIPC‘83の新勢力が活力を生み、和紙の世界のリストラクチャーは現在進行中であると見受けられます。

#### 21世紀をむかえて

2007年、京都の上村芳蔵の呼びかけで和紙の生産者が結束し、『21世紀和紙総監』が刊行されました。現在つくられている手漉き和紙、機械漉き和紙、加工紙の殆どすべてを網羅した出版は、現代の紙匠たちの『技と心』を永遠に世界に伝えるマイルストーンにふさわしい未曾有の大事業として実施されました。総監にはIPS'83以降に紙漉きをはじめた新世代の紙漉きも加え、総点数1070の現物サンプルが納められています。さまざまなメディアが和紙を取り上げ、関連出版も盛んで、ことと和紙にかんしては第二の出版ブームとなつていきます。

日常生活に多用される紙が殆どすべて洋紙にとって変わられた現状では、和紙にしか担えない存在意義を梃子にして存続しづける方策を広く世界に求めることが期待されます。大学の美術教育の一環として、紙漉きを取り入れるところが出始めました。過去に和紙は精

度とローコストを競う印刷技術の革新に対応できず、文字媒体としての市場を失いましたが、デジタルプリントの普及によりイメージをのせる媒体として、印画紙では得られない豊かな情感に魅了された写真家やデザイナーに注目され、新しい市場を開拓しています。小学生から紙漉きを体験させ、社会勉強に組み込む取り組みも始まっています。21世紀の和紙は過去のライフスタイルに依存する一子相伝の家業でも日本のお家芸でもなく、担い手受け手ともに“世界の和紙”として再構築されるものと信じます。国際化に向かってすみはじめてからまだ4半世紀、ダード・ハンターの偉業が実りあるものとなるまでにかかった100年の時間をかえりみれば、道未だ遠しで、和紙を愛しかかわりを持つものたちの持続的な活動とネットワークづくりによる世界での基盤づくりが不可欠であると思われれます。